

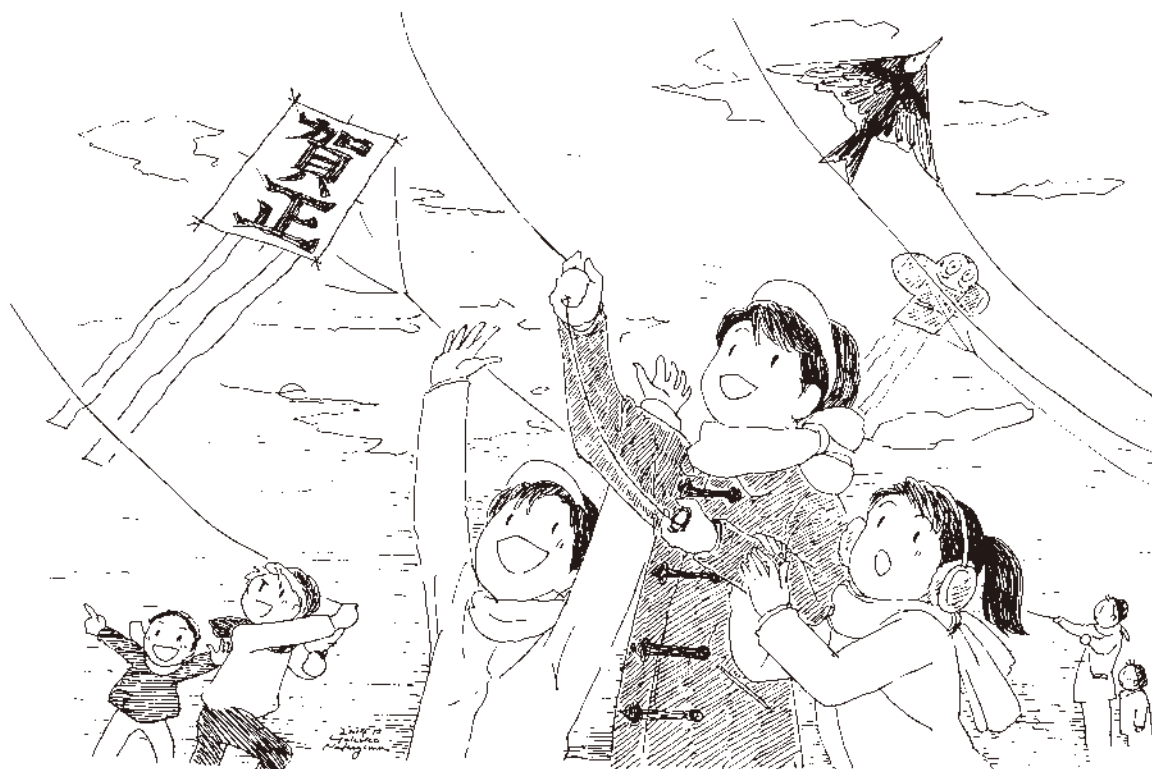
ひかりのこ

光の子



No.167 2015.1.1

●年間聖句 あなたがたも互いに相手を受け入れなさい。(ローマの信徒への手紙 15 章 7 節)



明けましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いいたします。

社会福祉法人 光の子どもの家

「たこあげ」

表紙絵・中島由起子

「日当たりて」

白鳥の来て湖の面皺くちやに

冬の目をこぼさぬように籠を編む

下足札ポケットに年惜しみけり

日当たりてねんねこも嬰もふくらみぬ

どろにでもなれと溶け出す雪だるま

凍大根お天道様の匂ひせる

糸績んで績んで三寒四温かな

俳人 黛 まどか

発行／社会福祉法人 光の子どもの家 TEL/0480-72-3883 FAX/72-6649 振替/00130-1-128022
編集／光の子 編集委員会 e-mail:hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp 〒349-1155 加須市砂原277 印刷／プリンテング瑛和
HPアドレス/hikarinokodomonoie.com

「次へ」

理事長 菅原哲男

謹賀新年。
この年が皆様と私たちにとって祝福に満ちたものとなりますようお願い申し上げます。

光の子どもの家はこの年創立30年目を終わり、これから次の30年を目指して歩き始める。

34年ほど前の秋、田中郁夫、竹花信恵とともに日本キリスト教団東大宮教会に原田史郎・多恵子牧師を訪ねて「光の子どもの家」の創設構想を語り合い、その実現を祈った。

翌年6月福島勲荻窪教会牧師、田中春女医師、佐藤信青山学院大学教授、竹花咲園科医師、仙道富士郎山形大学医学部長、高瀬美武三愛学園長、原田史郎牧師、秋間典雄元大利根東小学校長、梅沢三保加須市長夫人、菅原哲男、田中郁夫、竹花信恵によつて社会福祉法人光の子どもの家設立準備会が立ち上げられた。

何よりも、資金調達が焦眉の急であった。

菅原、田中、竹花の最初の志を得た者たちが、前職の退職金を出し合つて、一八〇〇万円ほどを持ち寄りそれを資金の初穂とした。

設立予定地の確保は、志や理念しか持ち合わせない者たちにとつて困難を極めた。

土地の確保は最大の難問で、資

金の些少な団体だったことから、知人友人を頼り売り農地を探した。農地は、契約書を取り交わす段になつて、売り主が、親族から、先祖代々の財産を売り飛ばすこと許さないと言われた、などがあり、その数40カ所を超えた。

最後に、当時大利根町の秋山清県会議員のお骨折りで大利根町に一二〇〇坪の土地を確保できた。

土地が確保されて準備は進み、志を形にしたマスタープランを、当時都内有名建築事務所に所属していた一級建築士に依頼した。

埼玉県から厚生省に申請書が上げられた。翌一九八四年初夏、法人認可内示を得たものである。

一九八五年春には秋山建設によつて建物が形作られた。それと時を同じくして、地元大利根町に特大級の児童養護施設開設反対運動が巻き起こつたのだった。

しかし、このことがジャーナリストたちの良心を集めた報道により、人々の善意を喚起し、支援が全国的に拡大し、現在の大きな支援の土台を形成もしたのであった。

2月16日法人認可。反対運動の見通しがついた7月1日施設開設認可、子どもの受け入れに至つた。

その時の職員12名。地元との約束もあつて幼児だけがたくさんいるという変則的なたらきを強いられたが、それも、新人職員ばかりで、関わりを丁寧にすることが徹底できたものだった。

こうして始まった光の子どもの家の30年は、刀川和也監督によるドキュメンタリー映画「隣る人」によく表されている。

次の30年に向けた取り組みが新年度から始まる。田中郁夫を引き継いだ竹花信恵新施設長がその一歩を始めていく。

反対運動で躓いた滑り出しから、初めの初めをつくつた3人が施設長を務めるという願つた以上の30年間を終えることが出来たのは数多のご支援のおかげであつた。

今後どのように施設の運営を展開していくのが、今いるすべての大人たちのはたらきにかかつているのである。

「子どものための子どもの施設づくり」と「責任担当制による家庭的処遇↓家族の関わりも得て養育」以外の方法は今のところ無い。

よくもこんなによい人たちが集まつたものだ、と思えるはたらき人たちと、最も困難な状況を生きてきたステキな子どもたちが、ほんとうに生まれたことを受け入れ、出会つたことを感謝できるようなはたらきのために力を尽くしていくことを確認して、新たな出発の決意としたい。

乞うご支援！

来し方を想う

老健施設みゆきの丘施設長 仙道 富士郎

なんとも年寄りくさいタイトルではある。事実76歳の立派な年寄りなのだが、あまり過去を振り返るということはしてこなかったように思う。

ところが、最近、否応なく、大げさにいえば、自分の生きてきた道を振り返させられる羽目になつた。

事は大分前の話から始まるのだが、昨年の3月頃だったか、大学の事務の方が春の叙勲に内定したからと知らせに来てくれた。山形大学の学長を6年間勤めたことが、受章の理由であるという。正直驚いた。紙面上ではあまり明らかでない理由から、叙勲はないと思つていたから、

その話とは別に、ごだい、学生時代と同級生が冗談めかして言うことには「学生運動で逮捕されたことのある人間が、勲章など貰つていいのか」であり、そして、

「お祝いの会に行つたらばらすぞ」という言葉通り、叙勲を祝う会（以下、多くの場合、祝う会）の最後の教え子の挨拶の中に、同じテーブルに着席していた件の同級生の話は見事に生かされており、妻はそのことに少し驚いていたりしたのである。

しかし、くどくどと説明した事情などをよそに、今回の祝う会は私に大きな贈り物をくれたといま思っている。

普通、叙勲を祝う会の発起人には代議士などのお歴々が並び、祝辞もお偉い方々のスピーチが延々と続くのが常なのだが、今回の祝う会の発起人は、これも故あつて、ごく親しい大学以外のお付き合いの方二人と講座の後任の教授を除くと、全員の大学の教え子たちであつた。また、他の出席者の方にはこんなことを言つて申し訳ないが、出席者の中でいわゆるお偉い方は、私のことを常に立ててくれた前山形大学学長だけであつた。

ところで、これまで「光の子」には達観したような御託を並べてきたが、実は俗物そのもので、結構周りのことが気になる方なのである。学部長になつたり、学長になつたりすると、やはり欲と得が絡んだ話も多くなり、ある意味騒音だらけだった。そして、学長な

ど辞めて久しいのだが、その騒音はなかなか鳴り止まず、結構そのことで心理的に疲れる。しかし、祝う会が終わつたいま、この10年くらい、そんなつまらない心を持ち続けて生きてきたことをいまさらのように悔いている自分に気付いた。

会には180人の方が出席してくれたが、その約半数が山形大学時代の教え子たちであつた。顧問をしていた医学部柔道部のOB・OGと助教授・教授をしていたときに教室に来て研究した当時の若者たちである。もちろん彼ら全員が嬉々として参加してくれたとは言えない。「しかたないなあ」という浮世の義理もあろう。

ただ、会そのものは、お行儀よく席について食事をしている人はほとんどなく、立ちあがつて酒を注ぎに回る輩がやたら多くて、会が始まつて間もなく、全体が喧騒状態に陥つてしまった。

私はそのとき、遠き日々の柔道部のコンパや、となりの教室の教授を気にしながらの教室の夜な夜なの飲み会のことを思い出していた。よくも、よくも飲んだものである。以前「光の子」に書いたかもしれないが、我が家を舞台にした酒飲みで、当時の柔道部の学生の一人が午前2時ころになつて、

酒が足らなくなり、台所を探し回つて一升瓶を見つけ妻に尋ねた。「奥さんこれ飲んでいいですか？」いい加減頭に来ていた妻は言い放つた。「いいけど、それ蜂蜜だよ！」

しかし、あの破天荒な生活の束の中に私の生きざまは凝縮されていたわけで、きざつたらしく言えば、それが私の生の実体であつたと最近思うことしきり。

俗物根性から、望んで学長になつたりしたが、そこでも濃い付き合いはあつたし、いまでもそれは続いている。そのことを否定はしない。しかし、そのころの事を引きずっているような騒音などに今身を任せていて、そんな心理状態のまま認知症にでも陥つてしまつたら、その事だけが残像になつてしまふかもしれないのである。恐ろしい。

こんなことに想いつつた今、毎日すがすがしい。教え子たちに感謝しなければならぬ。来週の土曜日は、祝う会の中心に居た人々と我々夫婦による反省会、なおらいである。ある意味面倒なこんな話をそのとき彼らにしたものかどうか。



「共育ちカンガル―日記」

(32) 我が家のサポーター 近藤みちる

Kさんは、優希が2歳5か月のときから通い続けている個別療育の先生で、我が家の頼もしいサポーターさんのボスのような人である。もともと保健師として地域で働いていたKさんが、療育の世界に飛び込んだのは十数年前のこと。当時はまだ「発達障害」という言葉や概念が一般化しておらず、早期療育の場も限られていた。Kさんが仕事柄出会った発達障害と思しき子どもたちと家族は、周囲の理解も必要な支援も得られず、地域の中で孤軍奮闘している状況だった。Kさんはそんな現状に疑問を抱き、自ら療育の道を志す決心をした。そして臨床心理士の資格をとり、志を同じくする仲間と共に半ばボランティア同然で、古い借家を拠点として、当時としては画期的だった「個別療育」を始めたそうだ。

5年前、初めて優希を連れてKさんのもとを訪れた頃、私と優希はまさに出口の見えない真っ暗なトンネルの真っ只中にいた。周りには同じ年頃の親子が集う児童公園や子育てサロンもあって、ママ友も何人かはいた。だが優希が安

心でできる居場所はどこにもなく、私達は次第に地域社会との接点を失い、気づけば優希と二人ぼっちになっていた。

「定期的に通ってみる？きつと優希ちゃん、変わっていくと思うよ。」Kさんの言葉に、ぴんと張りつめていた緊張の糸が、一気に緩むのを感じた。今日からはもう、優希と二人ぼっちではなくなるんだ、そう思えただけで、明日を迎える勇気が湧いてきた。

それから、週一回の個別療育が始まった。最初のうちは「プレイセラピー」と言って、優希が興味を持ちそうな玩具や音楽などを使い、遊びを通しての療育だった。しっかりと見る力、聞く力を養うことに主眼が置かれた。自閉症児には視覚優位という特性があるのだが、優希はその傾向が人一倍強かった。視界に入るすべての視覚情報に反応し過ぎてしまうため、しばらくの間、療育室の壁という壁を白いシートで覆うことで視覚刺激を制限せざるを得なかった。

最近になってKさんに当時の優希の第一印象を聞いてみたところ

「ここまで育てるだけでも大変だっただろうなって。何せうちの療育室の壁を初めて真っ白にさせた子だったから」と笑っていた。

Kさんの療育のすごいところは、何といっても家族を丸ごと支援するところにある。一般的な療育は、子どもに主眼を置いて行われるのが通常だが、Kさんは家族単位で支えなければ子どもは育たないよ、と言う。たとえどんなに未熟な親でも、決して責めることはせず寄り添うのだ。特に母親に対しては、Kさんのもとへたどり着くまでにすでに幾重にも心の傷を負っているの、まずは母親を安心させてあげることが療育のスタート地点と言いつ切る。もう一つKさんのすごいところは、母親に療育者的役割を一切求めないところである。

これまで受けてきた療育では「次回来る時までにお家でこんなことをやってください」というような宿題を出されることが多かった。これは子育てだけで辟易している母親にとっては、結構なプレッシャーである。だがKさんは「お家で療育なんて頼むからやらないで。」が持論。子どもたちにとって我が家は羽を休める憩いの場であり、母親は甘えられる存在なのだから、それに徹しなさい、ということなのである。いつだったか、Kさんがこんな話をしてくれたことがあった。養

品は、東京ドーム数十杯分に当たるのだそうである。それは、世界の数千万人の人が、一年間食べていける量だという。

それ程までに、必要な量を超える贅沢な暮らしの中で、あの、天地自然の恵みに感謝し、安定した世の中に身を置いていられるということへの、心からの感謝の気持ちを、私たちは知らず知らずのうちに忘れてしまっているのではないか。

さすがに、現代の日本の状況の中では「キミトオヤトノ ゴオン アジワエ」とは、そのままの言葉通りに要求することは、難しいであらう。

「キミトオヤトノ：」の「キミ」とは、当時、天皇を現人神（あらひとがみ）として敬っていた時代のことであるから。

しかし「オヤノゴオンアジワエ」という部分については、どんな時代になっても、忘れてはならないのではなからうか。

普通の親は、子どものことを思い、或る程度自分を犠牲にしても「子どものために」「子どものために」と念じながら生きているのである。

したがって、親の恩というものは、当然のことながら忘れてはならない。

護学校の高等部に通うある自閉症の男の子が、ある日突然「自閉症ってなに？」とKさんに聞いてきたそうだ。彼は大人たちが自分の障害についてあれこれ話をして、胸に葛藤を抱えながら育ってきたんだろうと。Kさんはその子に「とても大切な話だから、ご両親に相談して了解をいただけたら、私からちゃんと話すね。」と答えたそうだ。実はつい先日、優希もこんなことを言い出して、私をドキリとさせたことがあった。

「ゆきは何年生になったら、お話しできるようにするの？」と。切なかった。学校で採まれる中で、お友達と自分との違いを感じ始めているのだろうか。

「どうしよう。この調子だと優希に、自閉症ってなに？って聞かれる日も近いのかな？」

Kさんはいつものように笑って答えた。

「優希ちゃんの心の成長は本当に素晴らしい！私は優希ちゃんを自閉症ってなに？って聞いてくれる子に育ってほしいと思ってるよ。そのときは明日に夢が持てるように教えてあげればいい。そんな素敵な日が来るまで、私がしっかりお付き合ひするから、大丈夫。」

春待つや積木つんでくづしてはみちる

ユースが伝えるところによると、親が自分の子どもに食べ物を与えないで、飢え死にをさせてしまうとか、或いは、子どもが自分の親を殺してしまうとか、常識では考えられないことが、現実には起きているのである。

そうすると「人間は万物の霊長である」などと、のん気に言っている。動物にも劣ると言わざるを得ない。

したがって、今さら「ハシトラバ：」と子どもたちに唱えさせることは、ナンセンスのように思えてくる。

しかし、あの「ハシトラバ：」の言葉で教えた感謝の気持ちは、子どもに限らず、我々おとなにとっても、忘れてはならないものはなからうか。



ハシトラバ

中島 睦雄

「ハシトラバ
アメツチミヨノ
オンメグミ
キミトオヤトノ
ゴオンアジワエ
いただきまあす。」

思い出してみると、昔は、と言っても、私が当時の国民学校の2年生か3年生の頃だったろうか。お昼の弁当の時間になると、みんなが手を合わせ、祈るようにして「ハシトラバ：」と唱えてから弁当を食べたものである。当時は、大東亜戦争の真っ最中であった。子どもたちは、この言葉の意味もわからずに、

これを唱えていた。そして、貧しい弁当を食べた。ふかしたさつま芋だったり、正月の残りの餅であったり。しかし、貧しくて我慢するのは、子どももおとなも同じであった。「欲しがりません勝つまでは。」この

言葉を心の奥に秘めて、みんな我慢をし、頑張ってきたのである。しかし、今、改めて考えてみると、貧しいながら一応食べる物があって、そして、それをみんなで揃って食べられたことを思うと、大変しあわせな事であったと思えるのである。

現代に於いてさえ、地球上のあちこちには、子どもたちが十分に食べることでできない国があるというのに。

それを思うと、現在の私たちも、あの「ハシトラバ：」の、感謝の気持ちを忘れてはならないのではないかと、改めて思うのである。「ハシトラバ アメツチミヨノ オンメグミ」言い換えれば、天地自然の恵みによつて食べ物を口に入れることができる。しかも、日本の世の中、社会が子どもたちを或る程度自由に、生命の危険もなく生かしている社会で、食べる物も、貧しいながら一応あるというところに、感謝せよという教えであったのだらうと今頃になって思うのである。

しかし、この現代の日本での恵まれた状況は、地球上のすべての国の人間に与えられているのではないということとは、現実が示すところである。

何かの新聞で見たのだが、現在の日本で、一年間に捨てられる食



明けましておめでとうございます。旧年中たくさんのお支え、お励ましをいただきまして本当にありがとうございます。本年もどうぞよろしく願いいたします。

この度、創立30周年を機に、光の子どもの家の施設長職を拝命致しました。ひとりでは何もできません。皆さまのちからをお借りしながら、引き続き子どもたちの暮らしをより豊かに展開できるように歩んでまいります。

課題は山積みですが、次の5年、10年を見据えていくスタートでもあります。「光の子らしく」その方向を定めていけるようにお祈りいただけますように、これからもどうぞよろしく願いいたします。

施設長 竹花 信恵

謹んで新春のお祝いを申し上げます。皆様方よりの熱き祈りとお支えにより、30回目の新年を子どもたちと共に迎えることができます幸いを、心より感謝いたします。

現在、厚生労働省の社会保障審議会福祉部会では、今後の社会福祉法人制度のあり方や見直しの議論がなされており、その中で社会福祉法人は公益性の高い社会福祉事業を行っている非営利法人であるので、適正な運営の確保と皆様に対し説明責任を果たす必要があるとし、社会福祉法人の情報公開が義務化されました。当施設においても30周年を迎え、

私は光の子どもの家の職員になって6年目を迎えました。未だに子どもたちとの関わりについて「これでいいのか」と悩み、試行錯誤を繰り返しながら何とか頑張っております。まだまだ未熟な私ではありますが、今年もご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

皆さまのご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

福島 文明

明けましておめでとうございます。皆さまのお祈りとお支えのおかげで、新しい年を迎えることができました。

この時期に思うことは、私が唯一の兄と暮っていた貴志兄ちゃんが亡くなってもうすぐ3年になるうとしていることです。この日まで生きてこれなかった貴志兄ちゃんの方も、子どもたちと一緒に元気に過ごしていきたいと思っています。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

細渕 野宜江

明けましておめでとうございます。

老体に鞭打って今年も頑張っていきたいと思っておりますので、よろしく願います。

五木田 供三

明けましておめでとうございます。旧年中はたくさんのお支えとお励ましをいただき、心から感謝しております。今年も新しい年を子どもたちと一緒に

記念事業の一環としてホームページを開いたいたしました。今後できる限り情報を開示していきたいと考えております。今後ともお支えとご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

新しい年も皆様方のご活躍とご健康をお祈り申し上げます。

田中郁夫

明けましておめでとうございます。昨年もおたくさんの方からお祈りとお支えをいただきまして、ありがとうございます。

新しい年が皆さまにとって、良い年でありますように。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

池田 祐子

明けましておめでとうございます。皆さまからのたくさんのお支えとお心配りに感謝いたします。今年も気持ち新たに、子どもたちと心が豊かになる暮らしを創ってまいります。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。

穴水 祐介

明けましておめでとうございます。昨年は色々とお当にありがとうございました。今年もよろしくお願いいたします。

お正月には各家でコタツを出して、テレビを観たりおせちを食べたりします。子どもたちも今から楽しみにしているよ

迎えることができますことを当たり前と思わずに感謝して、子どもたちと共に「楽しい暮らし、おいしい食事、温かくてホッとできるようなしつらえ」を心掛けて、一日一日を大切にしていこうと思っています。

これからのどうぞよろしくお願いいたします。

平川 光子

明けましておめでとうございます。旧年中は大変お世話になりました。皆さまの温かいご支援のおかげで30周年を迎えることができました。

子どもたちにとってわがままの言える「家」であり、帰って来られる「家」でありたいと思っています。これからも子どもたちと共に暮らしを大切にしていります。

皆さまにとって今年一年が良い年になりますように。

梅田 由味子

明けましておめでとうございます。おばちゃん役としてこの職場を与えられ、2年目を迎えることが出来ました。子どもたちと接し、学ぶことが多く、喜びに満ちて日々を過ごしております。

先日はある中学生が一生懸命食事の後片付けをしている姿に喜びを感じました。出来る出来ないではなく、その子の一生懸命を神さまは喜ばれているのだと学ば

うです。今年も子どもたちと共に、ゆつたりとお正月を楽しみたいと思います。

岩瀬 志穂

明けましておめでとうございます。光の子どもの家の職員として、子どもたちと一緒に新年を迎えられたことを嬉しく思います。

昨年の4月から職員として働き始め、日々子どもたちと向き合う自分の至らなさを感じていた一年でしたが、一方で子どもたちとの楽しいやりとりもたくさん思い出されます。今年も担当者としての自分と向き合いながら、子どもたちとの楽しい思い出をたくさん作っていききたいと思ひます。これからもあたたかいご支援をよろしくお願いいたします。

遠藤 恵里香

明けましておめでとうございます。今年もまた一歩一歩前に進んでいく子どもたちを支えていくために、地道にはたいていきたいと思ひます。

どうぞ今年もご支援よろしく願ひいたします。

積 みどり

新しい年に幸福の多いことをお祈り申し上げます。

昨年は何かとお心遣いをいただき、ありがとうございます。

せて頂きました。

今年も光の子どもの家で働かせていただきますことを感謝します。本年もどうぞよろしく願ひいたします。

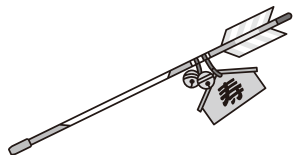
佐俣 浩代

明けましておめでとうございます。今年もよろしく願ひいたします。

私事ですが、長男が生まれる前に買ったデジタル一眼レフカメラももう8歳になり、今までたくさん写真の撮り方を教わりました。昨年の写真を見返すと、色んなところで色んな人にお世話になったなあとしみじみします。バザー、山登り、海水浴、感謝の集い、クリスマス：皆さま本当にありがとうございます。

最近スマホでもいい写真が撮れるので、ちょっと出番が少なくなってきた8歳の一眼レフですが、まだまだ頑張ってもらいたいで大切に使用していきます。今年もたくさん写真の撮り方をね、一眼レフ！

鈴木 洋一



原田家日記

新年明けましておめでとうございます。二〇一五年もどうぞ宜しくお願い致します。

月日が経つのは早いもので僕が『光の子どもの家』に戻ってきてから三度目のお正月をたくさんの方々の支援者の方々、たくさんの方々の方々、そしてここにいる子どもたちのおかげで無事に迎えることができました。僕は3歳、小学4年生までここで育ちました。その時は光の子どもの家でお正月を迎えることはほとんどなく、父親宅で迎えていました。そのためか、ここで過ごすお正月というのはここにいた時に体験することがなかったことで、お正月が来るのをとても楽しみにしている一つの理由です。

またお正月になると卒園生が一斉に集まる機会の場となっています。しばらくぶりに会う卒園生との対話が毎年の恒例となっています。私も含めてですが、卒園生がお正月やイベント・行事ごとにこ

の光の子どもの家に足を運ぶのは、お世話になった職員やここにいた子どもたちとの「縁」があり「恩」を感じているからだと思っています。僕もそういった関係作りができる関わりを今ここにいます子どもたちと築き上げていきたいと思っています。そして数十年後のお正月、テーブルを大人になった子どもたちと囲みたいと思います。

まだまだ寒い日が続きますが、体調を崩されないようにお過ごしください。

今後とも『光の子どもの家』を宜しくお願いします。

新吉屋 健太

光の中で 佐藤家

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願ひいたします。

昨年を振り返ると、また平凡ではない一年間でした。

施設での生活に不満を募らせていた思春期真っ盛りの眉子。年度

の初めこそは学校へ塾へと高校受験に向けて張り切っていました。5月を越えて夏が近づくころになると学校はさぼりがちになり、夜も遅くまで友人とふらつくような生活になってしまいました。ちょうどその頃、両親、本人双方から家庭復帰希望が出ていたことも相まって「この職員うざい、施設の生活も最悪！家に戻りたい！」という不満が爆発したのです。

現状から逃げるためとは分かって「家に帰ったら全てがうまく行く」と思い込んでしまっている眉子を留めておく事にはすでに限界がありました。全てがうまく行くわけではないということは誰にでも容易に想像できますが『ここにいるよりも1%でも前向きに生活できるなら』という思いで、家庭復帰へ向けて動き出すことにしました。

その後親元へ戻り夏休みを経て冬を迎えた現在に至るまでの間、親子喧嘩はもちろん不登校、無断外泊、家出など様々な問題を経た眉子の不満はいつしか「親うざい、

家の生活も最悪、こんな家出ていきたい」という言葉に変わっていました。親も「こんなはずではなかった」と眉子の引き取りを後悔するようなことを口にするようになりしました。そんな中で我々にできることは一つ。『関係が壊れたときはバラバラになるか、修復してより強固なものにしていくかの分岐点、本当の親子ならどちらだろう』ということを伝える事くらいです。

『もう一度だけ、もう一度だけ』と、互いに裏切られては許すことを繰り返す中で、まさに親子という絆を深める作業をしているように感じます。

小西 剛史

子どもたちの季節 仙道家

皆様、新年あけましておめでとうございます。こうして皆元気に新年を迎えられたのは皆様のご支援があつてこそだと、感謝申し上げます。

らぬご支援を今年もよろしくお願ひいたします。

田口 貴子

河のほとり 倉澤家

新年あけましておめでとうございます。昨年中は大変お世話になりました。本年も子どもたち共々よろしくお願ひいたします。

今年高校卒業予定の美加は、専門学校に進学することになりました。将来、美容関係の仕事に就きたいという目標を持っている美加は、都内の美容専門学校に進みます。

彼女は16年前に2歳で光の子どもの家にやってきました。その時に担当したのも私でした。その後、何人か担当が代わりましたが、中学3年生の時、縁あってまた私が担当することになりました。倉澤家に戻ってきた中学3年生の彼女は、私が伝えることなどほとんどないほど成長していました。それは彼女自身の努力の成果でもありますが、これまで彼女に携わって下さったたくさんの方々の力だとも思っています。幼い頃の彼女を大切に育ててくださった担当者の方々、本人も認めている、揺れに

揺れた思春期に真剣に向き合ってくれた職員、家族関係の希薄な彼女に、プライベートな時間を提供してくれた職員。今の彼女があるのは、そんなたくさんの方々の願いや祈りがあつたからだと思っています。

今年はそのことを彼女に伝え、共に感謝したいと思っています。そしてお世話になった方々への一番の恩返しは、目標に近づくために努力すること、生まれてきて良かったと思える人生を送ることなのではないか……ということをお女と確認する年にしたいと思っています。

倉澤 智子

子どもたちの季節 竹花家

夕食の準備で台所に立つ私に、高校から帰宅した美也子から「まきさん、うち、今日話したよー！」と少々嬉しそうに報告がありました。「友達にね、うちが施設で暮らしていること言ったんだ」と。高校に入学してから新しい友達にも恵まれ、部活や学校行事など充実した学校生活を送っている美也子でしたが、携帯を持っていないこ

とや親と暮らしていないことなど、友人との違いに「中学校までの地元の友達は事情をみんな知ってるからいいけどさ。やっぱり、高校の友達には言えない。時々『壁』を感じるんだよね……」と思いを打ち明けることもありました。

しかし、先日、仲良しグループの友人に自分が施設で暮らしているということをカミングアウトしたというのです。「で、友達はどのような反応だった？」と聞くと、「一人はすごいビックリしてて、もう一人は中学校の同級生にも施設から通っている子がいたみたいで、『ふーん』って感じだった」とのこと。少しホッとしたような、すっきりしたような美也子の表情を見て、私は嬉しくて「おめでとう」という気持ちでいっぱいでした。

子どもたちの生活の大半を占める学校での時間。その中で、何度「なぜ自分だけ施設に」と感じたことでしょうか。多感なこの時期に、どんなに悩んだり葛藤したり理不尽さに怒りを覚えたりしたことでしょう。それらを一つ乗り越えての『カミングアウト』……確実に成長している美也子に拍手を送りたいです。

牧野 由紀子

年末から年始に向けて、夏が終わると行事続きになります。当施設での行事もそうですが、それぞれの学校、幼稚園でも同じことが言えます。運動会、文化祭、表現発表会等子どもたちも大忙しです。各行事が終わると、待ちに待ったクリスマス。そのあとは餅つき、大掃除を経て、まったりと大晦日……。子どもたちはそわそわ、ワクワクしています。

年末年始はお盆同様、家族関係が濃くなる時です。ここにいます子どもたちは家族のもとに帰れない子が大半です。家族のもとに帰れるごくわずかな子達を見送る切なさや積み重なるばかり。そんな中でも「去年の大晦日に見たテレビは〇〇で、面白かった！」「今年もピザ食いたい！」(仙道家ではなぜか年越しそばならぬ、年越しピザが恒例になっています…)「こたつを早く出したい！一日中起きていい？」「お年玉で〇〇買いたい」等、昨年、今年の事をともに思い、何気ない時間を過ごせる事ができるのはわずかな救いだと思っています。

今年も様々な事が起こるのだろうなと思いますが、皆で乗り越える事が出来ればと思います。変わ



現場から

光の子らしく

明けましておめでとうござい
す。旧年中は大変お世話になりま
した。本年もどうぞよろしくお願
いします。

前回、丘実のアルバイトにつ
いて書かせていただきました。大変
申し上げにくいのですが、実はも
う辞めてしまいました。

「丘実は全然悪くない。店長が全
部丘実のせいにして文句ばっか言
ってくるから悪いんだ。」

丘実が辞める理由をそう言っ
ていましたが、それが事実でないこ
とは、長年、彼女と暮らしている
私にはよくわかります。ただ、丘

養護メモ

145

母子になる

菅原 哲男

謹賀新年

「何で知らないオレなんかを産
んだんだよ！」ぐしょ濡れの顔で
満は叫んだ。

「何だつて！この罰当たりメが
！」「私があんたを産む時、どん
な思いだったか知りもしないで！
ふざけるんじゃないよ！」と顔を
涙でぬらした母。

「ふざけてなんかいないよ、施
設なんかに入れて、親らしいこと
何もしないで！施設ってさあ、ど
んなに酷いか知らねえだろう！」
と、満も負けない。

義父は、下を向いて黙り込んで
しまった。

「私は子どもの施設は知らない
が、自分のせいで入った施設の辛
さは分かるよ。でもね、あんたを
産むときに、医者も周りの人も、
産むんじゃない。産んだらあんた
も死ぬよって言ったのさ。でも、
それでもあんたを産みだかつたよ。
命がけであんたを産んだ私の気持
ち、分からないだろ。女はみんな
そんな気持ちで、命がけで子ども
を産むんだよ。だから知らない子
どもなんか一人もいないんだよ。
満には、これだけは分かって欲し
いんだよ！」

家庭引き取りになった子どもが、

家出などを繰り返して、もう我慢
できないと、母と義父がその子を
連れて相談に来た。

親たちが、これ以上やっていけ
ないと取り付く島もない膠着状態
になった。

だからどうするのかが分からな
くなつてしまい、みんな黙った。
それぞれが涙にくれ、義父も顔を
ぬらしていた。

しばらくの重い沈黙の後、義父
が、こはオレがけじめをつけな
きゃならないだろう、と言って決
意に満ちた顔で話を引き取った。
じゃあ、知らない子どもじゃな
いわけだから、連れ帰って一緒に
やっていけるね。と私が阿呆のよ
うな顔で言った。

そして、忘れ物を思い出したよ
うな顔に戻った義父が「やるしか
ないだろうが、無条件ではないよ。」
みんなが暮らすための家には家
のルールがある、だからそのルー
ルを破ったら後はない。ほんとう
に立ち直りをするために必要な施
設に行ってもらう、と。

無断で家を出たことや、学校を
休んだこと、心配をかけたことな
どへの謝罪と、今後の暮らしの守
らなければならぬ最低限のルー
ルについて確認して帰って行った
のは、相談を受け付けてから十時

実の中ではそれが「事実」だとい
うことも・・・

アルバイトの当初の目的を達成
し、お互いに「ありがとう、また
何かの時にはよろしく。」で終わ
れる関係でいるためには、もっと
早い段階で辞めさせるべきだった
のかも知れないと、改めて反省し
ています。

アルバイト開始当初は自分でも、
「丘実、覚え悪いからさ・・・。」
と言っていたのにそこから、

「丘実が全然悪くない。」
にすり替わってしまう間に、どん
な気持ちのやりとりがあったのか

間以上たつた後だった。

満は、湘南のヨットハーバーな
どで有名な街で生まれ育った。
母も観光地特有の流行に乗るこ
とに心を遣う少女期から思春期ま
でをそこで過ごし、観光地に巣く
うチンピラたちに関わり食い物に
されながら転げ落ちてきたものだ
った。

長男の満を生みまもなく長女を
産んだ。

その後、父はチンピラから本物
のやくざに成り下がっていった。
やくざの抗争の後腐れから父はい
のちを奪われてしまい、その場に
いたことで母も捕まり、児童相談
所によって親子関係分離のやむな
きに至つたものである。

このときのやりとりで、母は「
あんたにはわたしの様な生き方を
しないでほしいと心から思ってい
る。だからどうすればわたしの様
になるのかは分かる。でも、どう
すれば私のようにならないのか
分からないんだよ。」と激しく泣
いたのだった。

ここで、満に辛い思いをさせた
ことは事実だから、私も満に詫び
るから、お母さんそのことは謝ろ
う、と言って頭を下げた。謝るこ
とが悔しいからではなく、辛い思
いをしただろう満に済まなく思っ
て涙が流れた。「いや菅原さんが
謝ることはない。わたしが何もか
も悪かったのだからわたしが謝ら
なければならぬ。満、ごめんね。
これから何とかやっていこうよ。」
と、母がまた激しく泣いた。

と想像すると、双方に申し訳ない
気持ちになります。

彼女の中の“出来ない”という
自覚は、指摘されると途端に（私
は）ちゃんとやってみるし！“に変
わってしまうのです。指摘を引き
受けられなくらいコンプレック
スが強いので、反発や反論で返す
事しか出来ないのでしょうか。彼女
にとっても攻撃は最大の防御です。
次のアルバイト先を速攻で探す
丘実に色々な人がアドバイスして
くださいましたが、結局、また同
じような仕事内容の場所にした丘
実です。

自分の中の“出来る（はず）”と
いう気持ちと、実際の“出来る”
に大きな隔たりがある丘実。あれ
も出来ない、これも出来ないでな
く、何とか自分の実力に見合うよ
うな仕事を・・・と思っではいるの
ですが、なかなか難しいです。
彼女の自立について考えあぐね
ているときにふと思い出して、そ
れからずつと頭から離れないのは、
学生のときに観たテレビ番組の中
でギャングの頭のような人が言っ
た言葉です。

「俺たちは必要悪なんだよ。」
——お前たちがはみ出させた。お
前たちはこの者たちをその社会に

児童養護施設を利用する親たち
は誰も同じではないが、同じよう
に、思春期の過ごし方をどこかで
踏み外したことがその理由である
ことが多い。

しかし、この母のように、どう
すれば私にならないのかが
分からないのだ、と叫んだ問いは、
そのままわたしたちのそれでもあ
るのだ。誰がこうすればよいなど
と言えるのだろうか。だから、こ
うすればいいなどと言い切るよう
に言いたがる、いわゆる専門職の
話を、私は聞けない。

児童養護施設を利用するに至っ
た原因は、子どもたちにはないの
だ。だから子どもたちをいじって
ことを解決しようとするのはまや
かしでしかない。

その原因をつくった親や家族た
ちがそのことを認め、謝り、赦し
ながら母子であるよう一步を踏み
出していくことが解決のための必
須条件なのである。

あれから何度も呼び出され、連
れてこられて調整しながら四〇年
近くになる。

満は今、左官職の人徳のある親
方につき、職人としてよい腕を持
ち、ステキな伴侶に出会い、子宝
にも恵まれ五〇の坂を登り始めて
いる。

七〇になろうという母親と義父
は、いいご老人になり、時折子や
孫と行き来しているという年賀状
が、去年届いた。

受け入れない——

当初、自分の偽善を突きつけら
れたようで、とても衝撃的な一言
でした。

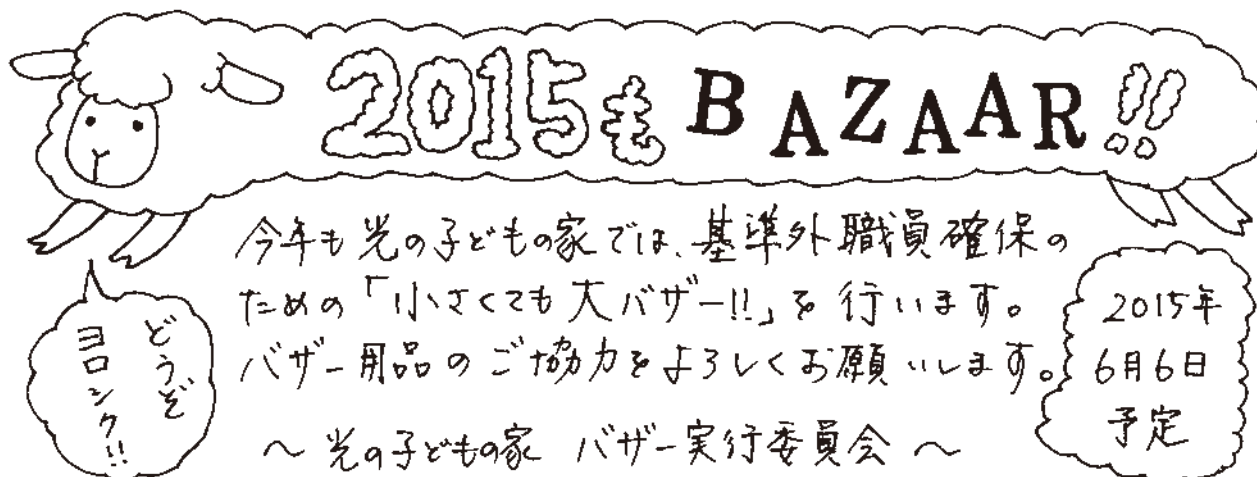
丘実はこのことを出た後、どこかに
居場所を見つけられるだろうか。
丘実のような人を受け入れること
の出来る社会を、私たちは作って
きただろうか。

それよりもまず、丘実自身が自
分の実力をそれとして引き受け、
生かすことができるように、その
ために何をしなければならぬの
かを考えなくてはなりません。

ただそれは、もしかしたら、誰
かが特別なレクチャーをすれば何
とかなるというのではなく、彼
女が自身を本当の意味で受け入れ
られるようになることが必要とい
うことで、それは、そのまま私に
返ってくる日々の関わりの質とい
うことなのかも知れません。

新しい年。この一年こそいい働
きが出来よう、自分を立て直し
たいです。そして、出来れば重要
なところでは間違えないよう祈り
ながら歩みたいと思います。

寒さ厳しき折、どうぞご自愛下
さい。



日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2014年9月～10月

2014年9月現在

- 幼児3名 小学生12名 中学生8名 高校生11名 計34名
- 5日 10年前に交通事故で亡くなった渡部かずき記念礼拝
もう成人となった同級生たちも駆けつけてかずきの思
い出を語る
- 6日 ボランティアの山田智さま裕子さまご夫妻が来訪
子どもたちにビーズを教えてください外で一緒に
遊んでくださる 感謝
- 10日 芹沢俊介氏による施設内研修
- 13日 小学校運動会 走るのが得意な子も苦手な子も一生懸命に走る姿は感動を誘う カメラ片手に応援
- 17日 埼玉県と加須市による社会福祉施設等指導監査
- 23日 (株)ネクストステージさまより3名来訪
子どもたちと遊んでくださる 大きなお支えに感謝
- 26日 若月健悟牧師による職員礼拝 感謝
加須市更生保護女性会の皆さま来訪
毎年のお支え感謝
- 27日 岡本有代さまによる生け花教室ボランティア
月一回の楽しいお稽古 感謝
- 30日 中学校との連絡会 学期ごとに行っている連絡会で家
での様子と学校での様子をそれぞれ共有 感謝
- 10月
- 3日 杉本英夫さまによる夕礼拝 感謝
- 4日 幼稚園の運動会 元職員や乳児院の元担当者が来てく
れて子どもたちの成長を確認

成長のスピードに驚き喜ぶ

- 5日 ボランティアの山田さんご夫妻来訪 感謝
- 6日 社会的養護関係施設第三者評価公表
- 8日 赤十字奉仕団による除草奉仕と光の子どもの家後援会
による手打ちうどん会 地域の皆さまの大きな力添え
に心より感謝
- 10日 東大宮教会久保島泰牧師による夕礼拝 感謝
- 11日 岡本有代さまによる生け花教室ボランティア 感謝
- 18日 中学校文化祭 合唱ではそれぞれクラスの仲間と一緒に
なって歌う姿が印象的だった
- 26日 東大宮教会教会学校幼小科の秋のお楽しみ会に参加
普段からとてもお世話になっている教会の皆さまと一
緒に楽しく遊ぶ子どもたち 感謝
- 31日 光の子どもの家のホームページが開設
機関紙「光の子」アーカイブは1号から全てお読みい
ただけます ぜひご覧ください！

<物品寄贈者各位>

(株)ネクストステージ 宇田川晴義 目黒晋平 榎本貴夫
丹千歳 大塚東一 相崎伸子 セカンドハーベストジャパン
鈴木金藏 曾根秀子 松本明子 ビームス古河店 長谷川つね
他多数の皆さま

☆旧年中は大変お世話になりました。心より感謝申し上げます
(洋一)

/// ———— 反 射 光 ———— ///

明けましておめでとうございます。
夜空には無数の星が光っており、寒
さを忘れて空を見上げる子どもの姿
が見られます。旧年中もたくさん
お祈りとお支えをいただき、心より
感謝申し上げます。▼新しい一歩を踏
み出す前に自分の歩んできた道を振
り返る大切な作業を、高校3年生は
それぞれ心の中でしているようです。
なぜ普通の家ではなく施設で育たな
ければならなかったのか、そのよう
な境遇にある人は知っているがそれ
がなぜ自分なのか。今まで目を背け
続けてきた真実を、自らが選択した
道を歩もうとする今なら受けとめよ
うと思えるのでしょうか。私たちには
彼らの大切な真実と、これから先も
ずっと共に歩んでいこうというメッ
セージを彼らに誠実に伝える重要な
役目があります。▼翻って私たちは彼
らのように新しい一歩を踏み出す覚
悟を、この新年を迎えるにあたり持
っているだろうか。子どもと共に歩
むということは、子どもと同じ地平
で同じ景色を見んとする心の在り方
だとすれば、彼らの覚悟は私たちの
覚悟でもあるはず。▼設立から30
年の歩みは今も、ここで出会った全
ての子どもたちと継続中です。至ら
ぬ点の多い私たちですが、本年もど
うぞよろしく願います。(洋一)